サーサーン・ガラス成立の背景
～ユーフラテス川以東へ流入した地中海周辺地域の化粧文化を探る～

岡山市立オリエント美術館
四角　隆二

Sasanian glass is well known as trade products travelled ancient Silk-road. But it is not clear that the definition of Sasanian glass and the difference between Sasanian and Roman/Byzantine glass, because the study was mainly based on looted materials. The author has investigated the Sasanian glass collection in UK, which was excavated late 19th- early 20th century. In the course of study, that leads to the hypothesis that the Sasanian glass and the cosmetic culture of Mediterranean are closely related.

In this study, it is focused on Sasanian glass from Kish archaeological site, 100km south of Bagdad. As a result of typological study and X-ray fluorescent analysis, it can be pointed out that the influx of cultures from the Mediterranean is north high south low, and that it is likely that the Mediterranean cosmetic culture such as scented oil and eye liner have brought by Christian.

1．緒　言

東アジア古代史研究において、「サーサーン朝のガラス」あるいは「ペルシアのガラス」といえば、教科書にも記述される正倉院蔵白瑠璃碗を筆頭に、奈良県新沢千塚や福岡県沖ノ島からの出土品、伝安閑天皇陵出土品や京都府上賀茂神社境内採集品などがよく知られている。こうした事実を重視し、サーサーン・ガラスは古代末期のシルクロード交易を代表する交易品と理解する立場から、「サーサーン朝は金属器やガラス、染織品などの工芸品を東西に輸出し経済的利益を上げていた」などとする理解がある（吉水 1992、小寺 2012）。

一方、西アジア考古学研究においては、「サーサーン・ガラス」の定義は不明確で、その年代観や帰属文化をめぐる議論に対し、研究者間で理解が分かれる場合も散見される。そもそも、「サーサーン・ガラス」は「3～7世紀、サーサーン朝領域で作られたガラス製品」である。しかし、1）1960年代以降、話題を提供してきた伝イラン北部古墓由来の博物館資料のほとんど全てはいわゆる盗掘品であって、考古学研究に必要な情報を喪失した「美術品」、2）メソポタミア所在のサーサーン朝都市遺跡出土品は欧米の限られた機関にのみ所蔵され、その公開が不十分、3）同時代の東地中海系ガラスの強い影響をうけて成立したサーサーン・ガラスは、器形や製作技法など視覚的属性から両者の区別は困難、4）製作工房の未検出という問題があり、サーサーン・ガラスに関する本質的な理解を妨げてきたのである。

報告者らは、6年前から大英博物館に所蔵されるサーサーン朝都市遺跡出土ガラスの考古資料化研究に取り組んできた。これらは19世紀末から20世紀初頭の考古学黎明期、英国隊が発掘したニネヴェやニムルドといった古代メソポタミアの著名都市遺跡からの出土したもので、これまでサーサーン朝を含む上層出土品は顧みられることはなかった。分析の結果、北メソポタミア都市遺跡出土品では、伝イラン北部古墓由来博物館資料ではあまり知られていない閉塞器形小型容器（小型瓶）が主体的で、開放器形容器（碗や鉢）は客体的数量を占めるに過ぎないこと、サーサーン朝が支配するユーフラテス川以東でガラス生産が本格化する3世紀以降も地中海方面から、ガラス容器が流入し続けていたことが判明した。

地金自体が価値を持つ貴金属器と違い、簡素な作りの小型ガラス容器そのものが価値を持ったとは考えにくい。ガラスが宝物としての扱いを受けた東アジアでの需要と異なり、メソポタミア都市遺跡ガラスの性質は実用の域を超えることはない。だとすれば、当時のサーサーン朝領域の人々にとって価値を持ったのはガラスではなく、その内容物ではなかっただろうか。この理解に立てば、正倉院蔵白瑠璃碗で注目を集める厚手のカット容器ではなく、メソポタミア出土品の多数を占める小瓶こそが、サーサーン・ガラスの本質を理解する鍵になるのではないか。

本研究は、地中海方面からユーフラテス川を越えて流入したとみられる香油と化粧文化の視点から、ユーフラテス川以東の吹きガラス産業成立と展開を検討しようとするものである。

2．方　法

アシュモレアン博物館（英国オックスフォード市）が所蔵するメソポタミア南部のキシュ遺跡出土品の資料化研究

The background of Sasanian Glass –In search of the Mediterranean Cosmetic Culture flow into beyond Euphrates–

Ryuji Shikaku
Okayama Orient Museum

を行った。アシュモレアン博物館より調査許可を得た110点余のうち、84点について観察、実測・写真撮影を行い、分類を行った。

さらに44点については、研究協力者の阿部善也東京理科大学講師により、可搬型蛍光X線分析装置（OURSTEX 100FA II）によって、非破壊分析を行った。この分析装置は、資料を真空に近い条件下（約500Pa）に置くことで、軽元素領域の感度を高める工夫がなされている。また、国内博物館に所蔵されるサーサーン・ガラスについて、資料化・蛍光X線分析も継続した。

さらに、大英博物館（英国ロンドン市）所蔵のニネヴェ（モースル市近郊）など北メソポタミア出土品と比較検討を行った。

3．結　果

3．1．キシュ遺跡出土ガラス容器の器形と頻度

キシュ遺跡はイラクの首都バグダードの南約100kmに位置する、大型都市遺跡である。1934年、メソポタミアに所在する都市遺跡として、初めてサーサーン・ガラスが報告書に記載された遺跡として名高い。今回、当時の報告に見られる資料を含め、84点を考古資料化した。

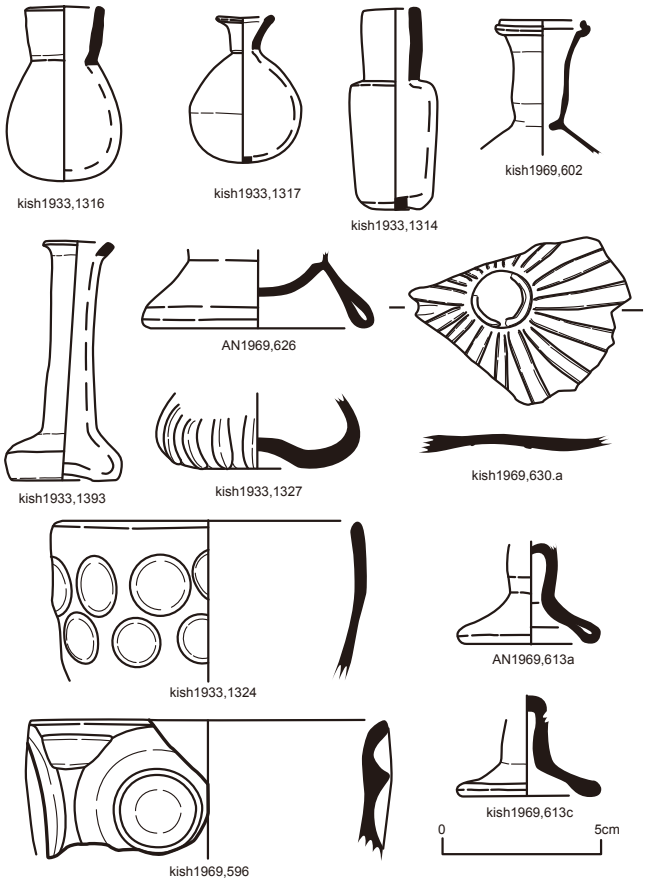

図１　キシュ出土ガラス容器

まず、器形に着目すると、器形判別可能な資料は大きく３分類できる（図1）。すなわち、小型瓶、碗形容器、台付杯である。このうち、小型瓶は22点で、短頸丸底、長頸平底が含まれる。開放器形容器は23点が確認でき、いずれも口径が10～15cm程度の厚手碗形を呈し、円形切子や二重円形切子が施される。台付杯は、器壁の薄い容器部は失われ、脚台のみが確認できる。

色調に着目すると、小型容器の大半は淡緑色透明で、厚手碗形容器には淡褐色を呈する例が含まれる。このうち、淡緑色は原料に不純物として含まれる鉄が発色したものである。一方、淡褐色は消色材として添加されたマンガンMnに起因するもので、いずれも意図的に着色された形跡はなかった。

これらの出現頻度をグラフ化したのが、図2である。小片のため器形判別が困難な資料が多数含まれるものの、小型壺（Bottle）と飲酒器（Bowl, Stemmed Goblet）の出現比率は2：3となる。

同時代の東地中海系ガラスの器種組成と比較すると、サーサーン・ガラスは大型貯蔵容器が欠落する。キシュ出土ガラスのうち、器形判別が困難な資料にも大型容器片と推定できる資料は見られなかった。

3．2．製作技法

製作技法に目を転じると、サーサーン・ガラスでは容器の製作・成形の両方において、ガラス製パイプ（共竿）を用いる。このため、底部にリング状の痕跡が確認できる（底部を処理したカットガラスでは確認できない）。キシュ出土品のポンテ竿の痕跡は、直径1.3～1.7cmのものと、直径2cmを超える資料が含まれる。一般に、細い吹竿の先にとることのできるガラス種は少なく、大型容器を吹くのは難しい。

これまでに調査した、北メソポタミア都市遺跡出土品（大英博物館所蔵）では直径1.3～1.7cmが大半で、直径2cmを超える資料は極めて少数だった。キシュ遺跡における大

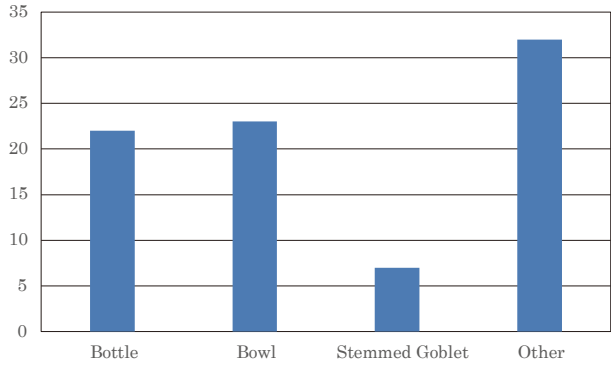

図２　キシュ出土ガラス容器の器種組成

口径のポンテ竿の出現頻度の高さは、厚手切子容器など比較的大型容器が多い事実と無関係ではないだろう。

3．3．装　飾

ガラスの装飾技法はホット・ワークとコールド・ワークに大別される。前者は、ガラスの温度が下がり、可塑性を失う前に行う加飾で、後者は製品となった後に施される加飾である。キシュ出土品では、モール型吹や突起装飾がホット・ワークの代表的なものであるが数はそれほど多くない。カット装飾を持つ厚手の容器片が比較的多く見られるが、いずれも開放器形の飲用器で、薄手の閉塞器形容器にはカットは施されない。

3．4．蛍光Ｘ線分析結果

東京理科大学阿部善也講師による非破壊蛍光Ｘ線分析結果（図３）によれば、北メソポタミアでは見られない不純物の多い組成を示すグループが確認でき（S1b-LP、S2-LP）、在地の工房が操業した可能性を支持するものといえよう。すなわち、北メソポタミアの遺跡では見かけない装飾を持つ、厚手あるいは大型の碗形容器にはキシュ特有の消費行動が反映されている可能性がある。

4．考　察

キシュ出土品は、これまで調査してきた北メソポタミア出土品と比べ、開放器形大型容器が多数含まれることが特筆される。厚い器壁のカットガラス片が多く見られ、カット文様の多様性も顕著である。メソポタミア全域を視野に入れると、正倉院タイプ円形切子碗はメソポタミア各地に広い分布を示すが、上賀茂神社タイプ二重円形切子碗、沖ノ島タイプ浮出円形切子碗はキシュ遺跡以外での出土は知られていない。このような器形やカットの多様性は、容器を製作する吹きガラス工房と、製品を装飾するカット工房が、キシュ遺跡周辺で操業していたことを推測させる。こうした事実は、碗形容器に対する消費者需要の地域性を反映しているものと考えられる。

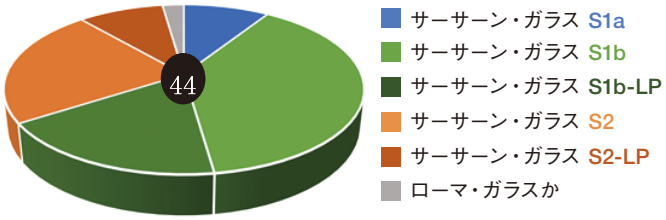

図３　キシュ出土ガラスの組成別割合
（分析：阿部善也東京理科大学講師）

4．1．北メソポタミア都市の状況

図４は、北メソポタミアを中心とするサーサーン朝都市遺跡出土ガラス（大英博物館所蔵）を器形別に分類したものである。閉塞器形小型容器が主体的数量を占め、その他の器形は客体的なものに過ぎないことがわかる。図１と比較するとその違いは歴然である。

これまでのところ、大英博物館所蔵北メソポタミア都市遺跡出土品とキシュ出土品を比較すると、以下の点が指摘できる。すなわち、1）閉塞器形小型容器はそれほど多くなく、2）開放器形容器が比較的多く、台付杯や厚手のカットガラス容器などヴァリエーション豊富であり、3）ユーフラテス川以西の西アジアで作られた、いわゆるローマ／ビザンツ・ガラスがほとんど含まれない、である。ニネヴェなど北メソポタミア都市では、３～７世紀頃に年代付けられる、東地中海系の碗形容器が確認できる（写真１）。代わりに、キシュではカット装飾の碗形容器が多く見られることが対象的である。

層位的な発掘が行われたウェフ・アルダシール Veh Ardasir 遺跡出土ガラスを分析したネグロポンチによれば、

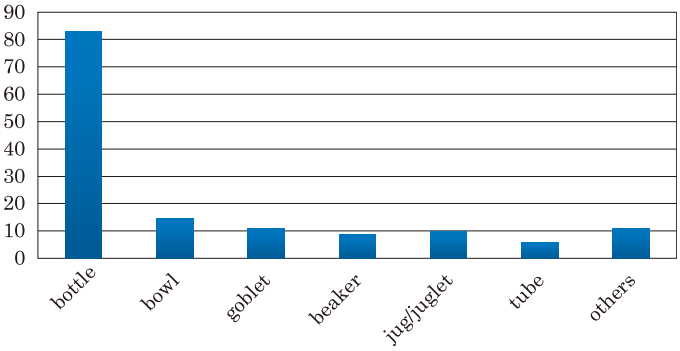

図４　北メソポタミア都市遺跡出土ガラス容器の器種組成

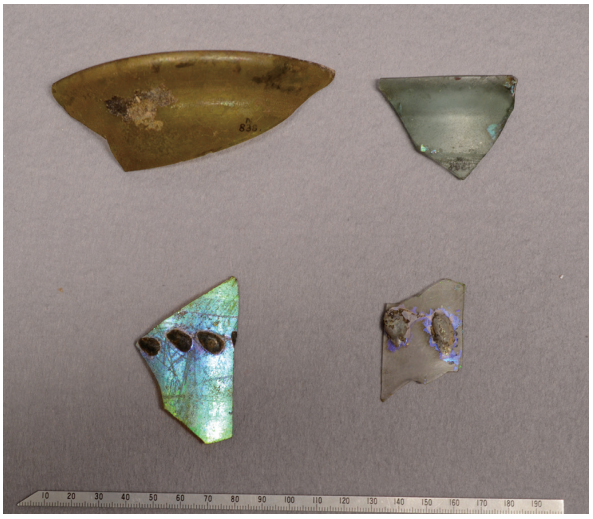

写真１　ニネヴェ出土東地中海系ガラス

3世紀前半に、吹きガラス産業が成立した。器形や装飾など製作技術は同時代の東地中海ガラスに準じ、長頸・短頸の小瓶が大半を占め、碗や鉢が大半を占めるという。当初、工具やモール型を用いたホットワークの加飾が中心であるが、4世紀以降、加飾技法はカットへ移行する。5世紀中葉に洪水被害にあい、都市が衰退する6世紀に至るまで、器形や装飾はほとんど変化がないという(Negro Ponzi 1983)。

上記のようなウェフ・アルダシールの状況は、大英博物館所蔵ニネヴェ遺跡の出土品と類似し、キシュ遺跡に大型容器が多く見られるのは同遺跡で検出された大型建物の帰属年代が6世紀に比定されていることと無関係ではないだろう(Harden 1934)。

ここで、ガラス容器の内容物について考えてみたい。まず、閉塞器形小型容器は、長頸・短頸で丸底・平底のものがあり、一般に香油瓶と考えられている。プリニウスが「軟膏はアラバスター製の箱に入れておくと一番持ちがよい」(「博物誌」13巻19)と記すように、ガラス容器に香油を保存するのは、ガラスの持つ耐酸・耐アルカリ性や気体や液体を通さない性質を利用し、劣化しやすい香油の酸化を防ぐためである。実際、伝イラン北部古墓由来のガラス容器には、アラバスターの縞文様を写したガラス容器が知られている。

一方、北メソポタミアのニネヴェでは、地中海周辺地域に特徴的なクフル(アイライナー)容器の在地模倣品が見られるなど、西方からの文化流入が顕著であったらしい。こうした地中海方面からのクフル、香油などの化粧文化はどのような人々が持ち込んだのだろうか。

シンプソンは、ニネヴェにはキリスト教会やユダヤ教のシナゴーグがあった可能性を指摘している。また、写真1下段のガラス容器片2点は、東地中海周辺地域で4世紀頃用いられたランプと考えられている。メソポタミアでは、ニネヴェとウェフ・アルダシールの2遺跡で出土が確認でき、いずれもキリスト教会が所在していた(Simpson 2005)。

写真2　ニネヴェ出土クフル容器

報告者はかつて、サーサーン朝のガラスと銀器がそれぞれ、器形や文様に類似性が低いことを指摘した(四角 2016)。こうした相違には、それぞれの使用者と場面の違い、すなわち、地中海周辺地域の文化に親しんだ人々が主に用いたガラス容器と、イラン固有の文化の場面で用いられた銀器といった違いが想定できるのではないか。

今回分析の対象としたキシュでは、東地中海方面から搬入ガラスは見られない理由については、1)中南部メソポタミアにまでは地中海方面からの香油やクフルなどの化粧文化が浸透していなかった可能性、2)分析に使用した遺跡の存続年代の違い、が想定できるが、層位的な発掘が行われた遺跡が少ない現状では、前者の可能性を指摘しておくに止まる。今後、許可を得た全点について資料化作業と分析可能な資料については蛍光X線分析を行うことで、メソポタミア全域における実態を明らかになるだろう。

5. 総　括

地中海方面からの香油やクフルといった化粧文化の流入を跡付けるべく、中部メソポタミアのキシュ遺跡出土品の調査を中心に行った。予想に反して、キシュでは比較的大型の飲用器が多数見られた事実は、サーサーン・ガラスと地中海方面からの文化流入を考える上で重要である。閉塞器形小型容器の内容物は油だったと考えられる。メソポタミアにおける油はゴマ油が一般的であるが、サーサーン朝時代にゴマ油生産が飛躍的に増大したという記録はないことから、地中海周辺地域から流入したオリーブ油やオリーブ油をベースとした香油がその内容物だったと解釈できる。ローマ・ビザンツ帝国とサーサーン朝は政治的に対立しあったが、香油やアイシャドウといった化粧文化はユーフラテス川を越え、東へと波及していったのだろう。

層位的な情報を持つウェフ・アルダシール遺跡では、3世紀半ばの最下層から6世紀に至るまで器種組成に変化がないことが報告されている。大英博物館所蔵の北メソポタミアを中心とする都市遺跡出土品の器形はウェフ・アルダシール遺跡の器種組成に準じていたことから、筆者はサーサーン朝において「ガラス容器は香油やワインなど地中海的要素の強い文化と強固に結び」ついて成立し、その性格を変えることはなかったと解釈してきた。しかし、本研究で明らかとなったキシュ遺跡出土品からは、地中海文化的要素は南北メソポタミアで温度差があることを示しており、再検討する必要があることが判明した。今後は、サーサーン朝領域で活動したキリスト教徒やユダヤ教徒の動向について検討する中で、サーサーン・ガラスの成立と展開について考察していきたい。

（主要参考文献）

1） Harden, D.B. “Glass from Kish,” in S. Langdon and D. B. Harden, ‘Excavations at Kish and Barghuthiat 1933’, Iraq 1: 131-36. 1934
2） Negro Ponzi, M. ‘Glassware from Choche（Central Mesopotamia)’. Arabie orientale, Mésopotamie et Iran méridionale de láge du fer au début de la période islamique, R. Boucharlat and J-F Salles（ed.), Editions Rocherche sur les Civilisations, 33-40. 1984
3） Simpson, St.J ‘Christians at Nineveh in Late Angiquity’. Iraq 67/1: 285-294. 2005
4） 小寺智津子『ガラスが語る古代東アジア』同成社、2012
5） 四角隆二「岡山市立オリエント美術館所蔵突起装飾ガラス碗をめぐる考察」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』28、1-11 頁。岡山市立オリエント美術館、2014
6） 四角隆二「古代末期、東方拡散したサーサーン・ガラスの二面的性格」シンポジウム「古代西アジアと人類史における『グローバリゼーション』」要旨集、2016
7） 由水常雄「古代のガラス」「世界ガラス美術全集 1　古代・中世」求龍堂、1992